

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

青木涼子 能声楽家

Ryoko Aoki / Noh Singer



CREATOR^{No} INTERVIEW 136

青木涼子 Ryoko Aoki

能の「謡」を現代音楽に融合させた「能声楽」を生み出し、現代の作曲家を惹きつける「21世紀のミュージック」。ペーテル・エトヴェシュ、細川俊夫らこれまでに世界20カ国50人を超える作曲家たちと新しい楽曲を発表。2013年ジェラール・モルティエに見出され、テアトロ・レアル王立劇場での衝撃的なデビューを皮切りに、現代音楽の本場ヨーロッパを中心に活動。ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、フィレンツェ五月音楽祭管弦楽団、スペイン国立管弦楽団、アンサンブル・アンテルコンタンポランなどトップオーケストラとソリストとして共演するほか、パリの秋芸術祭、ムジークフェスト・ベルリン、アルス・ムジカ音楽祭など世界の代表的な音楽祭にも招聘される。世界からのオファーが絶えない、現代音楽で最も活躍する国際的アーティストのひとり。

国内において自ら主催する新曲委嘱シリーズ「現代音楽×能」を2010年より毎年開催し、2014年にデビューアルバム「能×現代音楽」(ALCD-98)をリリース。コロナ禍においては世界の演奏家とリモート演奏するYouTubeライブ「能声楽奉納」を開催し累計8,500回以上視聴され国内外のメディアで話題になるなど、常に新しい表現に挑戦している。2021年にアンテルコンタンポランのチェリスト、エリック＝マリア・クテュリエとリモート録音したセカンド・アルバム「夜の詞」(ALCD-131)をリリース。

東京藝術大学音楽研究科修士課程修了(能楽観世流シテ方専攻)。ロンドン大学博士課程修了。2015年度文化庁文化交流使。2019年度第11回「創造する伝統賞」受賞。港区観光大使。

公式ホームページ <https://ryokoaoaki.net/>

Twitter <https://twitter.com/ryooooaoki>

Instagram <https://instagram.com/ryooooaoki>

YouTube <https://www.youtube.com/c/RyokoAoki>

No

136

青木涼子 能声楽家

RYOKO AOKI / Noh Singer

能を持つ日本のDNAを新しい形で伝える。

クリエイターインタビュー

“日常が旅になる”現代音楽コンサートを街の中で

published_2022.04.20 / photo_yoshikuni nakagawa text_akiko miyaura

日本の伝統芸術である能の中でも、「謡(うたい)」の奥深さに魅了され、追求してきた青木涼子さん。けれど、その活動は単に伝統を継承していくことではなく、伝統に息づく日本特有のDNAを大事にしながら、謡という素材を通して新しい芸術を生み出すことです。2010年からは世界の第一線で活躍する現代音楽の作曲家たちとタッグを組み、謡の魅力を別の角度から引き出す「現代音楽 × 能」を主催。2013年にマドリードのテアトロ・レアル王立劇場(Teatro Real)での衝撃的なデビューを皮切りにロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団(Royal Concertgebouw Orchestra)、アンサンブル・アンテルコンタンポラン(Ensemble intercontemporain)などヨーロッパの名だたるオーケストラやアンサンブルとの共演を重ねながら、常に新しい謡の形を発信しつづけています。青木さんの歩んできた道のりと共に、海外で感じる芸術、アートの在り方や、日本の伝統芸術が進む未来などを語っていただきました。

サントリーホールはあこがれの場所であり、晴れの場。

私は大分県出身ですが、東京にはじめて家族で遊びに来た時に宿泊したのが、溜池山王にある「全日空ホテルズ(当時)」でした。隣接するカラヤン広場に行くと、今回撮影をしたサントリーホールがあって、テレビの生中継をやっていて。まさに都会という感じで、とても興奮したのを覚えています。その後、大学入学のために上京しましたが、それからはサントリーホールにコンサートに行ったり、今も夏になるとサントリーホールに毎日のように通っています。私にとってはあこがれの場所であり、今も足を運ぶたびに気分が上がる“晴れの場”です。



サントリーホール

「世界一美しい響き」をコンセプトに、世界に誇るコンサートホールとして 1986 年に誕生。段々畑状になった客席がぐるりとステージを囲むようにつくられた、「ヴァンヤード（ぶどう畑）形式」を日本で初採用したホールでもある。音響的にも視覚的にも演奏者と聴衆が一体となって、臨場感あふれる音楽体験を共有できるのも特徴。また、壁面の内装材にウイスキーの貯蔵樽に使われるホワイトオーク材を使用したり、ステージ頭上のシャンデリアはシャンパンの泡を模していたりと、サントリーらしい遊び心も魅力。

画像：© サントリーホール

そのサントリーホールの舞台に、はじめて立たせていただいた時はとても感動しました。『サントリーホール サマーフェスティバル 2021』では細川俊夫先生作曲のオペラ『二人静 ～海から来た少女～』を上演したのですが、これは 2017 年にアンサンブル・アンテルコンタンポランと彼らの本拠地であるパリで世界初演をした作品。その後、ドイツのケルン、カナダのトロント、韓国のトンヨン、アメリカのニューヨークで公演をし、サントリーホールで日本初演を果たしました。



サントリーホール サマーフェスティバル

毎年多くの人々が訪れる、サントリーホール恒例の夏の音楽フェスティバル。現代音楽に特化し、最先端を越える世界の一流音楽家の演奏を聴ける貴重な機会。難解に捉えられがちな現代音楽を楽しく気楽に、そしてリーズナブルに触れられるチャンス。毎年テーマ作曲家が選出されるが、2022 年夏はイザベル・ムンドリーが担当する。2022 年 8 月 28 日（日）開催予定。

画像：© サントリーホール



細川俊夫作曲オペラ『二人静 ～海から来た少女～』

幼い弟を失い、地中海の海辺に流れ着いた難民の少女・ヘレンに、12 世紀の日本に生きた舞手・静がとりつく。かつて武將の恋人であった静はその男の子を身ごもっていたが、時の権力者によって、武將は討伐され、武將と静の間に生まれた子も砂に埋められてしまう。抗いがたい暴力の犠牲となった 2 人の女性の悲劇が、時と場所を越えて重なり、やがてふたりの声はひとつになっていく。ソプラノ歌手と、青木涼子の謡によって見事に奏でられ、世界各地で評価を得ている作品。画像はサントリーホールにて日本初演の様子。

画像：© サントリーホール

実は、『二人静 ～海から来た少女～』では私の声をいつも PA で拡張していたのですが、サントリーホールでは、はじめて PA なしで歌いました。オーケストラの音域と私の音域がちよ
うど重なるので、私の声が聞こえづらいののではないかと、細川先生は最初心配なさっていた
のですが、ホールの音響が本当に素晴らしくて。サントリーホールの音響設計をされた豊田泰
久さんは、世界の数々のホールを手がけられていて、建築家のやりたいことを生かしつつ、しっ
かり音響環境をつくれる方。豊田さんにも本番で実際にお聞きいただき、PA なしでよく聞こ
えていたととても喜んでいただきました。

能において一番大事とされる " 謡 " の味わい深さ、面白さに魅了された。

『二人静 ～海から来た少女～』は劇作家の平田オリザさんが能『二人静』をベースに、現
代を反映して書いてくださった脚本をもとに、細川先生が能の " 謡 "、ソプラノ、そしてオー
ケストラの編成で作曲したものです。能と聞くと、能面をした役者が舞う姿を想像される方が
多いのではないのでしょうか？ 私も最初は同じイメージを持っていましたし、幼い頃からバレエ
をやっていたので、はじめて能のお稽古へ行くと時は舞う気満々で向かいました。でも、そこで
教わったんです。「まずは座って謡いなさい。能において謡が一番大事だよ」と。



謡

能の演技は、謡(うたい)と所作(しよさ)で成り立っている。音楽部分の謡には、シテやワキなどの登場人物によ
って謡われるものと、地謡(じうたい)によって謡われるものがあるが、セリフを含め声によって謡われるも
の全体を「謡」と呼ぶ。謡の文章と発声法、節回しとがあ
いまって、単なるストーリーの展開にとどまらない、
詩的な趣が醸し出されているところにも謡の特徴があ
る(参考：文化デジタルライブラリー)。

画像：©427FOTO

もともと声を出すことは好きでしたが、低くて女の子らしい高音が出せないこと、それで、
合唱でみんなとキーが合わず歌えないことが、子どもながらに嫌だなと感じていました。でも、
謡は低い声がいいとされる。コンプレックスでもあった声が、むしろ合っていたんです。そして、
お稽古を重ねるごとに独特の歌唱の面白さを知り、味わい深くて魅力のあるものだと感じるよ
うになりました。



青木涼子 能声楽家

AOKI RYOKO / Noh Singer

published_2022.04.20 / photo_yoshikuni nakagawa text_akiko miyaura

謡の可能性、汎用性を感じ、「能声楽家」の道へ。

その後、東京藝術大学で能を学んでいましたが、実技だけでなく、もっと学術的にも学びたいとロンドン大学へ留学をすることに。当時、とても苦労したのが能を客観的に見るということでした。長く能の世界にいたので、どうしても近すぎて見えないことがある。英語で博士論文を書く時にも、先生に「なぜ、客観的に書けないの?」と何度も指導を受けましたね。けれど、600 ページに及ぶ論文を書くうちに、だんだんと客観視できるようになっていきました。能を習っていた頃は、みんな一言一語が分かるという環境だったので、知らない人に説明する機会自体がありませんでした。でも、海外の方のほとんどは能を知らないの、基本の説明をすることからはじまる。ほぼ知識がない人に、どう説明すればいいんだろうと、一つひとつ考えることが客観的に見る視点につながったのかな、と。

学生時代から、能とは異なる分野との共演をやっていましたが、湯浅譲二先生との出会いは大きな出来事のひとつでした。先生がずいぶん前に書かれた『雪は降る』という、謡と西洋楽器のアンサンブルの曲があって、過去一度だけ上演されたそうです。ある時、ご自宅を探されたら、その譜面が出てきたそうで。何十年ぶりに再演したいから、この曲を謡える人を探していると声をかけていただきました。『雪は降る』を謡った時に感じた、「西洋楽器と謡は合うんじゃないか」、「謡には凡庸性があるんじゃないか」という期待は、能楽師でも研究者でもない、能声楽家という第三の道を選ぶきっかけを与えてくれました。

謡は、西洋の音楽家には出せない独特でユニークな声が強み。通常はお囃子と一緒に奏でられるものですが、これをオーケストラやアンサンブルにのせたら、どうなるんだろうと考えた時、その広がりにとっても興味が湧いたんです。何より、謡の魅力を世界中の方にもっと知ってもらいたい。そこから、謡を素材とした作品を現代音楽の作曲家たちとつくり、能音楽家として世界で公演をする今のスタイルへとつながっていきました。

思わぬ解釈や誤解から生まれる新しい曲こそ、今の活動をする醍醐味。

現代音楽との融合を考える中で、最初にぶつかったのが楽譜や音楽構造が違うという点。能は音程、リズムなどの指定がありません。楽譜と台本がセットになった"謡本"はありますが、基本的に師匠から口伝で学んでいくため、西洋音楽のように楽譜に記述して再現するという芸術とは違うんですね。かつ、"謡本"はもちろん日本語で書かれているので、海外の作曲家にとってはハードルが高い。そこで楽譜に起こし、音源化して、謡とはなにか、謡を素材としてどう作曲すればいいのかを日本語、英語の両言語で説明したウェブサイト「作曲家のための謡の手引き」を制作しました。

このサイトで作曲家の理解が大分深まりました。しかし、はじめて謡に触れる作曲家が長年能を学んだ日本人と同じような理解をするわけではありません。もちろん思わぬ理解の仕方や誤解をするということもあります。でも、私はそこに面白さがあると思っています。作曲家の方は純粋に音楽素材として謡を取り上げるので、「ここが面白い」と思ったらその側面に注目して書く傾向があります。

例えば、今年2月にマドリッドでスペイン国立管弦楽団とスペインを代表する作曲家ホセ・マリア・サンチェス＝ベルドゥ「Hacia La Luz (光に向かって)」という曲を世界初演したのですが、彼には西洋音楽の歌手では決して出さないような音色を強調して歌ってほしいと言われました。ずっとビブラートがかかっているような謡特有の発声法です。また、謡には「の～」と下から上にあがるように謡うことがよくあるのですが、私たちの認識ではあがった先の音を出すという意識で、前の音は準備段階のようなもの。でも、その準備をすごく気に入って強調した作品をつくった方もいました。

そもそも古くから伝わる謡と既存の西洋音楽を、表面的にちょっと合わせるということには私自身、興味がなくて。やりたいことは能をコピーすることでも、再生産することでもなく、謡を用いた新しい芸術をつくること。だから、自分の声は素材の一部でいい。その素材を使って、作曲家に"自分の曲"を書いてほしいというのが私の願いです。つくった曲を聞けば、作曲家の興味がどこにあって、どう謡を捉えたのかが見える。その視点が、私自身が気付いていない謡の魅力の再発見にもつながっています。作曲家の思わぬ誤解は決してマイナスではなく、新しい作品が生まれるという大きな醍醐味でもあると思っています。

青木涼子 能声楽家

AOKI RYOKO / Noh Singer



published_2022.04.20 / photo_yoshikuni nakagawa text_akiko miyaura

海外で感じるの新しいものに触れる "フック" の多さ。

私は「現代音楽 × 能」というプロジェクトを中心に、現代音楽の作曲家たちと能の謡を素材とした曲をつくり、能声楽家として公演をしています。謡も現代音楽も難解でハードルが高いものと感じる方もいらっしゃると思います。そういう私も、最初は能のことがまったく分からず、現代音楽にも詳しくありませんでした。でも、私は何事も勉強するより、まずはやってみた方が早いと思うタイプなんです（笑）。



現代音楽 × 能

国際的に活躍する多国籍の作曲家に、能の「謡」を素材にした作品を委嘱するシリーズ。今までに 19 カ国 42 名の作曲家が楽曲提供を行っており、現代音楽と謡の今までにない融合を実現してきた。そこで生まれた楽曲は多くの注目を集め、現在は各国の名門オーケストラなどから招聘されて世界中を飛び回る。コロナ禍においては、ヨーロッパの演奏家とリアルタイムにリモート演奏する YouTube ライブ新型コロナウイルス終息祈願「能声楽奉納」を配信。その方法と同じく、東京の青木さんとパリのクチュリエ氏がリアルタイム遠隔セッションを行い、両拠点で同時録音したアルバム「夜の詞 Yoru no Kotoba」をリリースした。

画像：©RYO HANABUSA

それこそ今の活動をはじめた当初も、西洋音楽を学んできた作曲家との共通言語がなかなか見当たらず、理解しきれないこともありましたが、「とにかくやってみよう」「言葉では理解できなかったとしても、つくった曲を歌えば作曲家のことが分かる」という思いで前に進んでいく中、段々と共通言語が増えていった感覚があります。やっぱり実際にやると開けること、学ぶことって、たくさんあるんですね。だから、皆さんにも、まずは構えず謡や現代音楽を聞いていただきたいなと思います。

ただ、残念ながら日本では、まだまだ知らないものに触れる機会が少ないのかもしれないですね。海外で公演する中で感じるのは、新しいものに会う"フック"がとても多いこと。今年2月、マドリード国立音楽堂（Auditorio Nacional de Música）でスペイン国立管弦楽団（Orquesta y Coro Nacionales de España）とスペインを代表する作曲家ホセ・マリア・サンチェス＝ベルドゥ「Hacia La Luz（光に向かって）」を世界初演するためにスペインへ渡航した時にも、街中にふと現代音楽に触れられる機会があることを実感しました。



ホセ・マリア・サンチェス＝ベルドゥ「Hacia La Luz(光に向かって)」

2022年2月11日～13日まで、スペイン国立管弦楽団とマドリード国立音楽堂にて共演。スペイン人作曲家のホセ・マリア・サンチェス＝ベルドゥによる女声のソリスト、女声合唱、男声合唱、オルガンとオーケストラのためという大掛かりなオーケストラ作品のソリストを青木さんが務めた。古代ギリシャの哲学者、パルメニデスの詩をテキストとしたもので、壮大なシャーマニズムの物語が音楽によって奏でられる。

画像：©José Luis Pindado

例えば、以前に私も出演させていただきましたが、スペインの大手銀行が所有する私設のホールで月に一回、無料で現代音楽のコンサートを開催しているんです。そこには秘蔵のフランシスコ・デ・ゴヤの絵画があって、コンサートの日だけ演奏の背景に出してくれるんですよ。もちろん、音楽が好きで来てくださる方も多くいらっしゃいますが、中にはゴヤを見たくて足を運んだという人もいます。それがきっかけで現代音楽に興味を持ったり、もっとコンサートに行ってみたくて思ったりする人がいるかもしれない。そういうフックが、海外はとて多いんです。

そこにあるのは、自分たちの文化を常に進化させる意識

ちなみに、マドリードは私が好きな街のひとつです。食べ物おいしいというのが一番の理由ですが、多くのアートに触れられる街としても魅力的。ゴヤ、ディエゴ・ベラスケス、パブロ・ピカソという名だたる画家たちの作品が、さまざまな美術館に所蔵されている。かつ、プラド美術館（Museo del Prado）やソフィア王妃芸術センター（Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía）などは、夕方から無料開放をされていて気軽に足を運ぶことができます。コンサートホール、オペラハウスなどでの上演はもちろんのこと、美術館でもコンサートが開催されることもあって、たくさんの方が日常的にいらっしゃる。人がとても温かいので、私も公演後に道を歩いていると、「よかったよ」とみなさん声をかけてくださったり。嬉しかったですね。

マドリード以外にも刺激的な街はたくさんあるのですが、パリの環境もとても素敵だなと感じます。パリの真ん中には有名なパリ・オペラ座があります。その伝統的な場所で、すごく斬新な演目を上演していることに感激しちゃうんですね。ある時、サルヴォトーレ・シャリーノというイタリアの現代音楽の作曲家が見つけた、オペラをやっている。管楽器から出るノイズのような音を延々と奏でながら、アメリカの振付家トリシャ・ブラウンの斬新な演出を見ました。「え、何これ!？」と驚くような作品に出会うのも素晴らしい体験ですし、最先端の音楽に触れられるのはラッキーなこと。海外にいと、そんな出来事に何げなくぶつかるんです。

そして、今の作曲家がつくる新作オペラと同時に、古い演目も新しい演出でアップデートして見せる。ヨーロッパには古いものを今日に伝える、自分たちの文化を常に進化させるって意識が当たり前にあるんですね。私が各国で公演している細川俊夫先生のオペラ『二人静〜海から来た少女〜』も、そういった意識のもとつくられています。平田オリザさんが能の『二人静』を下地に、当時起こっていた紛争やテロを背景に書き下ろしてくださったのですが、もともとはフランスで上演されることを念頭に書かれたオペラでした。今はウクライナの紛争によって再び難民の方が多く出ていて、このお話がまたアクトリアリティを持ってきています。つまり、そうやって常に現代への警鐘を鳴らすメディアとして芸術や文化が機能しているんです。

当時のままの形で伝統を守るという意識は、日本特有にも感じます。例えばヨーロッパではバッハの音楽があって、それとは別に今の新しい音楽があるという感覚ではなく、バッハの音楽という下地があって、地続きに新しい音楽がつけられていく。そして、街で芸術に触れては今日を感じて帰って行く。その意識や環境に私はとても魅了され、だからこそ西洋音楽の作曲家と一緒に作品をつくりたいと願うのだと思います。

青木涼子 能声楽家

AOKI RYOKO / Noh Singer



published_2022.04.20 / photo_yoshikuni nakagawa text_akiko miyaura

日々を旅する気分で過ごせば見え方が変わる。

日本には未知のものに触れるフックがまだ少ないかもしれないというお話をしましたが、きっと旅する気分で毎日を過ごすと、違った景色が見えてくるような気がします。海外に行くとは今日は何を見よう、どこへ行こうとアンテナを張るように、日常も旅している時と同じように考えられるといいな、と。私たちは何もない都市で生きているわけではなく、常に観光ができる、様々なトップレベルの文化に触れられる街で生きているという意識で過ごせば、フックはもっとたくさんあるのだと思います。現にサントリーホールのサマーフェスティバルのように、いつもよりは安価なチケットで、世界トップクラスの音楽家やアンサンブルに触れられるコンサートもある。本物の音を聞けるってすごいことですから。

フックの規模が、どんどん広がるとまた面白そうです。例えばサマーフェスティバルの会場から、六本木ヒルズや東京ミッドタウンへ音楽家が出張して、たまたま通りかかった方が「もっと聞いてみたい」と思ったら、そのままシャトルバスでサントリーホールまで行けるとか。あと、回遊式のコンサートも素敵だなと思います。21_21DESIGN SIGHT の安藤建築を音楽家が一日ジャックして、館内のいろんなところで演奏しているのをお客さんが歩きながら聞けると楽しいですね。あと、以前、磯崎新さんとアニッシュ・カプーアが共同でデザインした移動式コンサートホール「ルツェルン・フェスティバル アーク・ノヴァ (Lucern Festival ARK NOVA)」もすごく魅力的でした。東北でスタートしたプロジェクトでしたが、東京ミッドタウンの芝生広場にも設置されました。六本木の真ん中にまたあのようなコンサートホールが世界の建築家によってできたら面白いなと思います。



ルツェルン・フェスティバル アーク・ノヴァ

東日本大震災の復興支援として生まれた、巨大移動式コンサートホール。磯崎新とアニッシュ・カプーアが共同でデザインしたもので、風船のように膨らませることでホールが完成。「ルツェルン・フェスティバル アーク・ノヴァ 2017 in 東京ミッドタウン」ではコンサートや映画上映、トークなどが行われた。

六本木なら、アートが好きの方が多くいらっしゃるイメージがあるので、アートと現代音楽でコラボレーションできたら楽しそう。パリだとルーブル美術館（Musée du Louvre）、オルセー美術館（Musée d'Orsay）、フォンダシオンルイ・ヴィトン（Fondation Louis Vuitton）でも、現代音楽のコンサートをやっています。六本木だと、安藤忠雄さん設計の21_21DESIGN SIGHT、隈研吾さん設計のサントリー美術館、黒川紀章さん設計の国立新美術館、または森美術館で現代音楽のコンサートができれば、面白そうだなと思います。

日本の伝統の DNA が形を変え、世界のどこかで生き残ること。

個人的には「JAPAN VALUE」にとっても関心があります。日本ではこれまでデザイナーやクリエイターが、日本特有のプロダクトや美意識を現代的センスで表現することをやられている。私のやっていることは、それに近いと思っています。伝統を守ることは大切で、素晴らしいことだというのは大前提ですが、個人的な思いとしては日本の DNA が形を変え、世界に生き残ることにとってもロマンを感じるところがあって。例えば、お寿司という日本の伝統が形を変えてカリフォルニアロールになったり、イタリアのスパゲッティが日本でナポリタンとなったりしたように。

例えばヨーロッパへ行って、たまたま見たオーケストラのコンサートで、外国人が謡を謡っていたら感動すると思うんですね。そんな未来を夢見ながら、謡を通じて、日本の遺伝子を変化させ、素晴らしい芸術を生み出すきっかけをつくっていったらと思っています。

撮影場所：サントリーホール 大ホール（1枚目）、ホワイエ（2～4枚目）

取材を終えて……

青木さんの活動はある意味、日本の伝統に対する考え方を大きくうち破るような革新的なこと。それは破壊ではなく、能、謡への愛とリスペクトが大きいからこそ、世界へ伝えたいという思いが原動力になっているのだと、その口調やお話からひしひしと感じました。そして、どうしても古い物と新しい物が分断されがちな日本的思考に対しても、新たな気づきを与えてくれるものです。凜として強さを持った女性ですが、食やスイーツの話になると、目をキラキラ輝かせてお話くださる姿はとてもチャーミング。世界で活躍される実力者であることを忘れてしまうほど、自然体で親しみやすい姿もとても魅力的でした。(text_akiko miyaura)